



2017年4月15日発行（季刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2017年4月
第110号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



目 次

漢点字の散歩（47）（岡田健嗣）	1
追悼、菅野良之様（岡田健嗣・他）	9
点字から識字までの距離（103）（山内 薫）	15
毎日新聞「憂楽帳」から（有田浩子）	17
東京漢点字例会報告とわたくしごと（木村多恵子）	18
漢文のページ	27
ご報告とご案内	29
編集後記（木下和久）	31

漢点字の散歩（四十七）

岡田 健嗣



「句読点」と「語彙」

このタイトルに「と」という助詞を使いましたが、一般には「と」という助詞は、その前後の語句が、何らかの関係を持っていることを表します。しかしここでは単に、二つの事物を並列に並べていることを表します。この「と」の前後の「句読点」と「語彙」は、関係づけようと思えばどこまでも深く関係づけられますし、「句読点」そのものが、「語彙」の一つでもありますので、そこからさらに関係を広げることでもできることとなります。しかしここでは、並列に並べたという以上の意味は、付与されません。拙文の進行に従って多少関係づけもされるかもしれませんが、ここではそれは本意ではありません。以下は「思い出話」となります。

「句読点」についての一つの思い出、「語彙」についての一つの思い出、この二つの思い出は、現在に至るまでの私の脳裏のどこかに、いつも暗くあるもので

した。

現在私は、『常用字解』の音訳の作業に関わりながら、音訳者の皆様と交流を深めております。漢点字訳については、本会の活動を通してスキルアップを図ることができたのではないかと思っております。そのスキルを音訳にも生かせないか、というのが、このプロジェクトの立ち上げを発起させた考えでした。しかしそれはかなり思惑違いだったようで、私は、音訳について、思いの外知らないことが多いことに気づかされて、我ながら忸怩たる思いを味わっております。

そんな流れで、『常用字解』の音訳とは別に、墨田区の図書館に所属されておられます音訳者の皆様の勉強会にも出席させていただくようになりました。

その席で「句読点」が話題になり、文章の切れ目とすることが取り上げられました。このことはそのまま私のごく若いときの、暗い思い出を想起させたのでした。

もう一つ、本誌にも転載させていただきました毎日新聞の記事の、有田様の取材を受けておりますときに、「それは語彙ということですよ」と、有田様はおっしゃいました。私は思わずはっとさせられたので

した。これも「句読点」の思い出と同じ頃、同様の暗い思い出となったエピソードがあったからに他なりません。

この二つの事柄について、私の心と頭を整理する積もりで、述べさせていただくことに致しました。

悪しからお付き合い賜れば幸甚です。

句読点

墨田区の音訳の勉強会の席で、「句読点」ということが話題になりました。「句読点」と言っても実際は、「読点」についてということになります。あまりに当然のことですので、それまで取り立てた注意は払われなかったのですが、「読点」の位置によって、その文章の意味するところが変わってくることを、例を挙げて見てみようということになりました。その文章の例を、まず読点を付さずに掲げてみましょう。

彼は静かに眠っている妻の脇に腰を下ろした。

このような文章は、恐らく欧文の翻訳文が一般化して、日本語の文章がその翻訳文に近づくことによつて

成立してきたものと思われます。しかし、現代の日本語の文章として不自然かと言えば、そういうことはありません。現在では誰しもがこのような構成の文章を認め得るに違いありません。

この文章、恐らく読点の位置によって、二通りの解釈ができるように思われます。

①彼は、静かに眠っている妻の脇に腰を下ろした。

②彼は静かに、眠っている妻の脇に腰を下ろした。

ご覧のように読点を、「静かに」という語句の前に置くか後ろに置くかによって、この「静かに」の語が眠っている妻にかかるか、あるいは腰を下ろそうとしている彼にかかるかというように違って来ます。①では読点は、「静かに」の前に置かれているので、「眠っている妻」にかかって、「静かに眠っている妻」となります。

②では読点が、「静かに」の後ろに置かれていますので、「彼は静かに……腰を下ろした。」となります。

さらにこの一行の読点の位置の違いは、読み手であ

る私たちに、異なった印象を与えます。

①では、「静かに眠っている妻」の脇に、彼は腰を下ろします。妻が静かに眠っているのですから、彼も静かに腰を下ろすに違いありません。そしてその妻は、果たして通常の眠りを眠っているのか、この文からはそこまで読み取れませんが、「静かに眠っている妻」の脇に、彼は腰を下ろすのですから、妻は、単に眠っているというより、病床に臥しているのではなからうか、とまで飛躍した読みを促しさえしそうです。病床に臥している妻の脇に、その夫である彼が、心配そうに腰を下ろして見守っている、という構図が見えてきたりします。

②では、「眠っている妻」は眠っているのですから静かであるかもしれませんが、取り立てて「静かな眠り」を眠っているとは書かれていません。しかし妻は眠っているのだから、安眠を妨げないためにも彼は、「静かに」妻の側に寄って、腰を下ろしたのでらうと理解されます。ここでも妻の眠りが通常の眠りかどうかは書かれておりませんが、①とは違って、妻は「眠っている」だけで、健康を害しているとも書かれていません。通常の眠りを眠っている妻の傍らに、夫であ

る彼が、静かに腰を下ろした、彼がそれからどうするかとか、妻が目を覚ますとかは、この文章からは読み取れません。

もっと別の読み方があるかもしれませんが、要はこの読点の位置だけで、文章の読みが、このように変わってくるというのが、この例の要点と言えます。音訳の勉強会の席では、この読点を、どのように表現するかを、課題として考えました。

今から四十数年前、私はこれと同じ話を、私より少し若い、点訳者を志望する、聡明な青年から指摘されたことがあります。と申しますのも、私が文章の「句読符号」について全く無知だったためで、彼が私に文章の話をする度に、私の理解が及ばずに、的外れの応対に終始したからに他なりません。

彼は点字を通して私と知り合いとなりました。点訳活動を行いたいと希望しておられました。それまで点字というものの存在は知っておられても、それがどういふものかまでは、ご存じありませんでした。点字がどういふ文字か、知ってみると、これで文章が読めるのかという素朴な疑問が、ふつふつと湧いてきたので

しよう。それを私にぶつけてこられた、それが先のエピソードとなったということだったと思われれます。

読点の位置でその文章の意味が変わってくる、私には驚天動地のことで、全く理解できませんでした。その場での反応は、恐らくパニックとも言えるものだったに違いありません。

点字の世界は、現在もさほど変わりありませんが、カナ文字しかありません。そのカナ文字も、ひらがなとカタカナの区別がありません。また、カナだけで書かれることを考慮して、いわゆる「分かち書き」をします。この「分かち書き」は、ある原則的なルールに則って行われますが、このルールにも、しばしば例外が設けられており、その例外の多さに、点訳者の皆様は、四苦八苦しておられます。

日本語の点字は明治に入ってから石川倉次によって翻案されたものでした。それは当時開発されたローマ字の原理を応用して組み立てられました。そのため、ローマ字の構成を応用した構造のカナ文字だけが作られて、漢字は作られませんでした。またそれを連ねて文章を組み立てる場合にも、ローマ字の原則を応用して、「分かち書き」をすることにしました。この

「分かち書き」の原則も、ローマ字の書記法に則ったもので、その書記法は、欧文の書記法を応用した、品詞と品詞の間にスペースを設けるというものでした。

現在は品詞の中でも名刺の後に助詞、動詞や形容詞の後に助動詞が続く場合は、スペースを入れないことになりましたが、他はこの原則に従っています。

勢い「句読点」は、「分かち書きされているので必要ない」ということからか、使用されませんでした。

私が成人するころに、分かち書きされた中に、句読点（句点は「、」、読点は「、」）を付された点字文が始めましたが、その句読点がどういう原則で付されるのか、それは現在も不明です。点訳に際して、本文に付されている句読点を、そのまま点訳分にも付したという以上には、説明されておりません。視覚障害者が文章を記すときに、この句読符をどのように使いたくするか、その原則は示されていないと言えるのではなからうか、そのように思われます。それは、「分かち書き」に使用されているスペースが、句読符の代わりになっていた長い年月にあって、後に活字本文にある句読符を、そのまま分かち書き文の中に付したとしても、触読する者にとっては、分かち書きのためのス

ページほどには感知されていないからに違いありません。私自身、点字の分ち書き文の中にある読点を、取り立てた区切り符号として意識することはほとんどありませんでした。言い換えれば、その分ち書きにメスを入れない限り、句読符も、影の薄いものになっ
てしまっている、現状はそのようだ、ということではないかと思われてなりません。

念のために先の単文を、ひらがなの分ち書きにしてみましよう。

かれわ しずかに ねむって いる つまの わきに こしを おろした。

私たち視覚障害者が読む点字表記の文章は、このようなもの延々と続きます。これまで私は漢点字を勉強する理由として、漢字を知らないことが、日本人である私に、どれほどの傷みをもたらしているかということを書いて参りました。以上のことを踏まえますと、単に「漢字を知らないこと」というよりは、「漢字仮名交じり文を読むことができないこと」と改めた
思いを強くします。と申しますのも、日本語の標準

的な文章にとつて、一つ一つの漢字という文字が大いに大きな位置を占めていることは確かなことですが、この漢字を中心に組み立てられた漢字仮名交じり文こそが、日本語の表記、日本語の構成を支えているのであつて、それに触れることができないことこそが、視覚障害者にとつて最も大きな障害となつているのではないかと思えるからです。音訳者の勉強会に出席して、過去の経験を思い起こし、私自身はそれを克服すべく努力してきた積もりではありますが、その方法を実現できていない現在を思えば、まだまだやり残していることが満載だなあ、というのが現在の感慨と言つてよいでしょう。

語彙

毎日新聞の有田様は、東京の羽化の会の発足時に本会の取材をして下さつて、それ以来お付き合いただいております。そんなご縁から、今回の記事をご執筆下さいました。

取材では、本会の活動について大所高所からご質問下さつて、「漢字を知らないまま成長して社会へ出る

ということとは：、「つまり語彙を獲得できないままということですか？」というご質問に至りました。全くその通りとお答えしましたが、お答えすると同時に、またも「句読点」のエピソードと同じ頃の、同様の思い出が想起されました。

また先の人物と同じ青年から、別の日に、「やはりゴイですよ。ゴイを身に付けなければ、世に乗り出すことはできませんよ。」という意味（些細は失念しました）のことを言われました。さて「ゴイ」、私は誠に困惑しました。彼にもその困惑は通じたに違いありませんが、そのような私の困惑は日常茶飯だったのですね、彼の反応は、「またか」というものだったように覚えていきます。

当時の私は、漢字の知識どころか、漢字がどういう文字かも知りませんでした。「彙」という文字の存在、「イ」という音読、「あつめる」という訓読と「はりねずみ」をも意味することなど、思いも寄らぬことでした。漢字の知識はありませんが、漢字音による熟語は多少暗記してはいますので、大急ぎで「ゴイ」とはどんな意味だろうと、乏しいながらも脳裏に

ある辞書をめくってみましたが、「語彙」などという熟語は、そもそも存在すらありませんでした。その代わりに出てきたのが、「語意」という熟語で、勿論このように漢字の熟語としてではなく、「ゴイ」、「ゲングのゴ（語）、イミのイ（意）」という形で現れたのでした。それを私なりに「言葉の意味」と理解して、その折りの彼との会話では、「ゴイ」とは「言葉の意味」として話を進めました。恐らく彼は、呆れ返ったままその日は分かれたのでしょう。「語彙」という「語彙」がなかったために、「語彙」の意味を取らなくなったという、シャレにもならない事態を招いたという次第だったのでした。

ついでに申せば、「語意」の「語」が、音読が「ゴ」、訓読が「かたる」、その意味は「ことば」、はなし、はなされたことば」というもの、「意」は、音読が「イ」、訓読が「こころ」、その意味は「人の思いや心のうごき」ということは全く知る由もありません。「語」は「ゴ」であって、「かたる」という訓読とは結び付かず、「意」は「イミのイ」であって、「こころ」や「思い」とは一緒になりません。「意

味」の「イ」が、「意識」の「イ」、「意思」の「イ」と同じ文字であるなどということも、夢にも思わないことだったのです。 「意味」も「意識」も「意思」も、文字通りには理解できないでいた、理解できない状態に置かれていたということだったのです。

さて「語彙」に戻りましょう。

「語彙」を『広辞苑』の電子版で引きますと、左のようになります。まず「彙」から、

《い 彙 たぐい。同類のもの。それを集めること。また、その集り。》

《一い 語彙 [言] (vocabulary) 一つの言語の、或いはその中のある範囲についての、単語の総体。また、ある範囲の単語を集めて一定の順序に並べた書物。》

とあります。英語の“vocabulary”の訳語のようですので、英和辞典も調べてみましょう。

vocabulary: (一) 個人、著者、一分野などの) 語彙 (二) い、用語数、用語範囲。 (一) 言語の) 総語彙。

ポケットサイズの英語の辞書には、

vocabulary: List of words in a language, arranged alphabetically with definitions.

とあります。「語彙」は、どうやら“vocabulary”の訳語と捉えてよいようです。ただし英語の辞書では、「ある範囲の単語を集めて一定の順序に並べた書物」という意味だけが取られていて、「一つの言語の、或いはその中のある範囲についての、単語の総体」という意味は、希薄なようです。英和辞典では、「語彙、用語数、用語範囲、総語彙」となっていて、辞書にありがちな円環に嵌った感をきたしています。

こうしてみますと「語彙」という熟語の意味は、かなりの抽象概念を指示していて、一言では語り切れない

いものがありそうです。「単語」、「文章」、「用語」など、言葉を切り取る単位は幾つかありますが、この「語彙」は、これらを総括した概念と言い得るもので、言葉を用いる範囲を、用いる主体の側から括った言葉の単位と言えばよいのかと考えております。

『広辞苑』や『岩波古語辞典』の編纂者であった故・大野晋先生は、先生の年代の東大の学生の語彙数は二五〇〇〇ほどに上ったが、現在（一九九〇年代）では、一五〇〇〇ほどに減っているとおっしゃって、残念がっておられました。この語彙の数とは、どのようにして算出されたのかは分かりませんが、「語彙」を右のように捉えるならば、その人が使いこなせる言葉を、言葉の句切りを単位として数えるということと解してよいのでしょうか。

私の語彙数がどのくらいあるか、誠に心許ないものがあります。しかしここに述べましたように、漢字を学んで漢字の世界に歩みを進めることができるようになってから、言い換えれば、本会の活動を始めてから、それ以前との間には、格段の隔たりができたに違いありません。私の読書はかなり我が儘なもので、

その多くがプライベートな音訳サービスに依存してきました。そこから得た書物の知識や志向から、本会の活動の方向を検討して、現在に至っております。

現在の私の読書は、本会の活動から得たもの、恐らくこれが「語彙」ということになるのでしようが、再度これまでの読書を繰り返してみようというものになっております。本会の活動以前の読書を、活動から得たものによつて読み直そうということです。既に読んだ書物を、時日を隔てて読み返すということとはしばしばありますし、そこから得るものや書物の印象がかなり違ったものであったりすることは珍しくありません。そういうことも含めて、読書は、楽しみの一つになっております。「語彙」を豊富にする、思い返せば、そのことを、漢点字の創案者である川上泰一先生は、私たちに望んでおられたに違いありません。

視覚障害者が漢字を使いこなして読書をするということは、まだまだ一般ではありません。しかしそれが実現できなければ、視覚障害者の読書は本当の読書とは言えない、このことは、譲れない一線でもありません。

追悼、菅野良之様

岡田 健嗣

この三月十五日、東京漢点字羽化の会会長の、菅野良之様が急逝されました。私たちは一週前の三月の定例会で、お元気なお姿に接しておりました。私たちは会員はこの報を、受け入れることができませんでした。会員間の通信が、暫く途絶えました。

菅野さんは、本会発足当初から、会の主要メンバーとして、活動を担って下さいました。本会の活動は、パソコンを利用して漢点字書を製作することが主なものです。まずは会員間で小グループを作って、パソコンに入力し、それを校正するという作業を行います。菅野さんは、あまりパソコンはお得意でないご様子でしたが、積極的に取り組んで下さいました、とともに、会員のグループ分けや入力・校正の分担など、積極的に差配して下さいました。

本会は、二〇〇五年の秋に、活動の趣旨にご賛同下さった皆様によって発足しました。活動の趣旨とは、パソコンを使って漢点字書を製作するというものです。勿論そこには、漢点字とはどういう文字か、視覚障害者の置かれている文字の現況はどうか、そこに漢点字を普及させるとはどういうことかといった、前提となる状況をご理解いただくことから始めたのですが、皆様、多少の戸惑いは感じておられるご様子でしたが、十分ご理解いただけました。菅野さんも、暖かく受け止めて下さいました。

菅野さんのお顔は、そのように始まった活動の中に、会員が集まるところには必ずありました。会では毎月一回の定例会と、同じく一回の漢点字の学習会を行っております。そこには何時も、菅野さんが少し早めにお出かけ下さって、機材や席の準備のために動いて下さるお姿がありました。また会の間、必ず何度かジョークを飛ばして、空気を和ませて下さいました。私は一度、そのジョークを受け損ねて、後から思えば

もう一步だったなあと悔やんだことを覚えております。何の話からか、英語の表現で、「どこどこへ行く」というとき、前置詞に「for」を使うが、よく覚えておかないといけませんね、といったお話しになりました。そのとき菅野さんがエピソードとして、「アメリカで飛行機の切符を買うとき、“to New York”と言ったら、切符が2枚出てきた」というお話しをなさいました。そのとき私は、うまく受け止められずに、「そういうこともありませんか」と、無粋な応対をしてしまったのでした。後になって、せめて「“for New York”>と言えば、4枚出たかもしれませぬね！」くらいのことを言っていたらと悔やまれたのでした。

このように菅野さんは、本会と、また会員の間に、なくてはならない空気や水のような、当然そこにおられなければならない存在だったのでした。これから私たちは、その不在に耐えて行かなければなりません。安らかにお休み下さい。

左は、この三月十五日に急逝されました、東京漢点字羽化の会会長の菅野良之様へ、会員から寄せられた言葉です。菅野様の元へ届きますことを願っております。

ご冥福をお祈りします。またお会いしたかったです。定例会の時は、車椅子で席につけるようにまわりの椅子を片付けて下さったり、忘年会では介助して下さい、すごくありがたく、絶対に忘れません。

佐々木幸代

定例会や学習会の会場予約など縁の下の力持ちのことから、学習会での事前の下調べや報告書の作成まで、さまざまなことに取り組んでくださりすっかり頼り切っております。大変お世話になりました。ありがとうございました。「おやじギャグ」を仰った後のシャイな笑顔、ハーモニカの演奏、ジーンズをカッコよく着こ

なしていたことが思い起こされます。天国で奥様と仲良くお過ごしく下さい。そして私たちの事を見守り、時には叱咤激励をお願いいたします。

杉田ひろみ

「駄洒落、そして笑顔」

菅野さんのお得意の駄洒落と、その後の少年のような笑顔を忘れる事が出来ません。

もうお会いできないのはとても寂しいです。

今は奥様とご一緒にずっとあの笑顔でいらっしやることでしょうか。

どうぞお安らかに。 合掌

青島久美

菅野様、あつけない旅立ちの訃報を伺い信じる事もできないほどに大変驚いております。

菅野さんとは、東京学習会が始まった時からご参加頂き博士のような存在感を感じておりました。熟語を話される度に漢字が次々と出て来るのですがその時の

淡々とした話し方が耳に残ります。

無駄口は一切お話しされない方だと思っていると、こちらから問いかけると楽しい言葉がポツリポツリと返って来る存在感のある方でした。

もうその語りも聞けないと思うと残念でなりません。

もっとたくさん、菅野さんの人生観をユーモア一杯でお話を聞きたかったです。

学習会には、ぜひ天国から助け舟を出して下さいませ。

大変お世話になりました。有難うございました。謹んでご冥福をお祈り致します。

(漢点字学習者) 風間幸子

暖かい時間

7年近く、駅から会場までの送り迎えをしていただきました。初日からいきなり迷子になり、タクシーで学習会に滑り込んだことを、まるで昨日のことのよう

に思い出します。皆で菅野さんのハーモニカに合わせ
て歌ったこと、駅から会場までの道々でお話した楽し
かったおしゃべり、どれも暖かな時間でした。

ほんとうにありがとうございます。

(漢点字学習者) 竹井真紀子

菅野さんのことは驚きました。

あまり突然なので 言葉もありません。

ご冥福をお祈りするばかりです。

秋野八重子

菅野様

あまりに急な訃報に、まだ信じられない思いです。

古語辞典では最初から同じグループでしたが、精力的
に入力なさるので校正が追い付かなかったのが思い
出されます。

いつもオヤジギャグで周りの皆さんを和ませてくだ
さる、優しいお人柄が大好きでした。

どうぞ安らかにお休みください。

森本純子

菅野さん、東京羽化の会や学習会で、また新年会
で、楽しいお話しをありがとうございます。学習会ではハーモニ
カも吹いてくださり、皆で歌も歌いました。

28日に親戚の不幸があり、菅野さんと同年齢の、私
の一年以上の方です。二重にショックを受けていま
す。何だか変な文章ですが、お許しください。

齋藤寿美子

菅野さんへ

余りに突然逝ってしまわれて、言葉もありません。
羽化の会での真摯な取り組みは、本当に頭が下が
りました。

特に、学習会での活躍は、忘れられません。

岡田さんの補足説明は？ に対する回答は毎回楽し
みでしたし、驚かされてもおりました。

もうあの、はにかみの笑顔と逢えないと思うときみしい限りです。

心からご冥福をお祈りします。
本当にありがとうございます。

関 正子

菅野さんは、初回より毎回こころよくおひきうけくださり、2月の例会時にお会いしてお願ひした『萬葉集釋注 六』の校正も、横浜に届いています。

担当していただいた二九六四〜三〇〇八番（巻十二）の原本のページを静かに開いてみました。

これまでのご協力とご厚情に深く感謝いたします。
今後東京の例会にうかがうたびに、おやさしい笑顔を思い出します。

（横浜漢点字羽化の会） 吉田信子

寡黙でいておもしろい冗談を言う菅野さん
私は大好きでした。
いつも早くから準備をしている姿が忘れられませ
ん。

伊藤

菅野良之様
ハモニカ伴奏ありがとうございました。

羽化の会では、『萬葉集釋注』文庫版全10冊の漢点字訳を10年計画でとりこんでいますが、4回の校正に必要な人数を、横浜だけでは十分に集めることができ
ません。年2回、東京漢点字羽化の会の例会にうかが
い、第2・第3校正をお願いしています。

たった1週間前にはお話でき、何時ものようにお世話になりましたのに、3月15日に、娘様から、こんな驚きと悲しいお知らせをいただくとは思ひもありませんでした。
そして次の4月の例会にはもうお会い出来ないとは！

発足当初から率先していろいろ細かいことに気づいてなにくれとなくお世話くださいましてありがとうございます。ございました。

あまりお話しならない方かと最初は思っておりましてのに、ユウモアたっぷり、わたしたちを笑わせてくださいました。

とくにわたしの楽しかったことは、漢点字の学習会
のときに、テキストの一段落ついたところに、日本の
うつくしい歌や童謡などの歌詞が挿入されており、学
習中のホットタイムとして、その歌をみんなで歌いま
した。

そのとき菅野さんはハモニカをご持参くださって、
わたしたちが歌いいいようにハモニカで伴奏してくだ
さいました。ホットする楽しいひとときでした。

ご家族の中でもそのほか会社や、他のグループでも
皆さまをゆったりさせろ素敵なお方でしたでしょう。

ほんとうに長い間、私たちの大事な「漢点字を広め
る」ためにご協力くださいましてありがとうございます。
した。

菅野さんはご自慢の娘さんと息子さんをおもちで幸
せでした。

ですから娘様も息子様も、そのほかのご遺族の皆様
も、何時までもお体をお大切になさってお過ごしくだ
さい。

私は、菅野さんのハモニカの音色を何時までも覚え
ているでしょう。

本当に長いことありがとうございます。

木村多恵子

点字から識字までの距離（一〇三）

野馬追文庫（南相馬への支援）（二一）

Sさんからの寄稿

山内 薫

前回に引き続き、今回は福島県立図書館のSさんから原稿を寄せて頂きました。

東日本大震災から六年が経った。原発事故後に設置されたリアルタイム線量測定システムの存在も、日常の風景の一部となった。東日本大震災では、原発事故が発生したことで物理的な被害だけでなく、多くの人に精神的なダメージをあたえたのだと思う。目に見えない放射性物質による汚染は、詳しい情報が得られないことで、より一層不安が大きくなった。新聞やテレビの津波や原発事故の衝撃的な映像や、嘆き悲しむ人たちの姿や声をあまりにも多く見聞きしすぎて、私自身、現実におきている不幸な話に鈍感になっていた時

期があった。「気の毒に」とは思うが、胸を打たれることがない。「もう知りたくない」と感じたことさえある。そんなときに、私を叱咤したのがたまたま手にとった詩の一節だった。

「自分の感受性くらい 自分で守れ ばかものよ」
茨木のり子の詩、『自分の感受性くらい』の一節である。当時は無意識のうちに、つらくならないように自己防衛していたのだと思う。この詩を読み、涙が溢れた。

日々、目を通す新聞には、被災した人たちの悲惨な状況や犠牲者の情報があふれていた。凄まじい現実を受け止めきれず、心が鈍化していったのだと思う。当時、「新聞は毒だ」と言った知人がいた。だからといって、知らないままではいられない。

震災後、人の生死について、すっと心に届いた本があった。『エンジェルフライト 国際霊柩送還士』（佐々涼子 著 集英社 二〇一二）というノンフィクションである。「国際霊柩送還」とは、海外で亡くなった邦人の遺体を処置して遺族に届ける、日本で亡くなった外国人を故国に送り出す作業のことだとい

う。著者は「おわりに」でこう述べている。「彼らは遺族の涙を止めようとは思っていない。国際霊柩送還の仕事とは、遺族がきちんと亡くなった人に向き合っ
て存分に泣くことができるように、最後にたつた一度の「さよなら」を言うための機会を用意する仕事なのだ。」「人間は時間をもとに戻すことができないし、失われたものを取り戻すことはできない。だが、死者とともに生きることにはできる。」

ノンフィクションよりフィクション、それも全くの異世界を描いたファンタジーの方が、素直に受け止められるものが多かった。『鹿の王』（上橋菜穂子 著 KADOKAWA 二〇一四）

は「生きる」ということを強く感じさせてくれるファンタジー小説だった。過酷で厳しい状況の下で生きる登場人物に共感しながら、私自身も心が強くなったように感じた。

先日、図書館に展示されていた富士山の絵を子どもが指さして、「ママ、見て！ 吾妻小富士だよ！」と言っているのを見かけた。吾妻小富士は福島市にある、富士山に似た山である。

そのとき私は、絵本『あさになったのでまどをあけますよ』（荒井良二 作・絵 偕成社二〇一一）を思い出した。「あさになったので まどをあけますよ」と、それぞれの場所で朝を迎えた子どもたちが窓を開け、「やまは やつぱり そこにいて きは やつぱり ここにいる だから ぼくは ここがすき」と、いつもの風景、いつもの朝を迎える。この絵本を読む度、東日本大震災で失われてしまった、ありふれた日常が、どれほど大切なものだったかを思う。

富士山を知らない子どもにとって、富士山の絵は身近な吾妻小富士に見えたに違いない。富士山は日本一だと言われるが、私にとっては吾妻小富士の方が大切な山なのだ。

富士山と吾妻小富士を間違えた子どもに、母親は「これは富士山だ」と教えていたが、私はこっそり親指を立て、「吾妻小富士！」と心の中で頷いた。

震災当時のことを考えると、悪い夢だったのではないかと思いたくなる。

今では少し客観的に考えられるようになり、マスメ

ディアによって繰り返し伝えられる「絆」や「つながろう」という言葉に、違和感を覚えるようになった。「絆」や「つながろう」という言葉には、縛られるつらさを感じる。立場や境遇の異なる人がいて、さまざまな価値観の人がいる。だからこそ、つながれない、そっとしておいてほしい人もいるのではないだろうか。「助け合おう」といわれた方が、私はうれしい。

福島県と宮城県の境にある海沿いの町、新地町の図書館には、東日本大震災直後の様子を紙芝居にした『ふくしま避難所物語』がある。新地町図書館の司書はこの紙芝居について、「震災を体験した今の世代の人にとっては見るのも辛い資料だろう」と言う。この紙芝居は「震災を知らない、これからの子どもたちに伝えていくための資料」だと考えているのだそうだ。

福島県立図書館「児童図書研究室ニュース No. 九三」（二〇一七年三月発行）では、震災後をはじめ「東日本大震災を伝える本」の紹介をした。そこには、こう書かれている。「東日本大震災から六年が経ちました。あのころ生まれた子どもたち、そして震災

後に生まれた子どもたちに震災について聞かれることがあると思います。あの時何がおきたのか、何を考え行動したのかを伝えるときに手渡したい資料を紹介します。震災を思い出したくない、忘れていたいという人も多いと思います。無理をして読もうとしないでください。読んでみたい、何かで子どもに伝えたいと思ったときに、このリストをご活用ください。」

今だけでなく、これからの子どもたちのために何ができるかを、私たちは考え続けていかなければならな
いと思っています。



左は、毎日新聞二月一日の夕刊「憂楽帳」の欄に、記者の有田浩子様がお書き下さいました記事です。大変ありがとうございます。

読みたい本は書店や図書館に行けばいつでも手にとれる。「横浜漢点字羽化の会」の岡田健嗣（たけし）

さん(67)から会報が届くたびに、それが当たり前にはできないもどかしさが伝わってくる。

岡田さんは全盲。漢点字は漢字を表す点字体系で、部首を1マス8点、最大3マスで一つの漢字を表す。盲学校では6点カナ点字しか教えておらず、大学卒業後、独学で学んだ。漢字の成り立ちや意味が深くわかるようになり、漢字とひらがなの交じる日本語の文章に近い形での触読(しよくどく)が可能になった。

しかし漢点字の習得者は全国で1000人弱といわれ、読みたい本を手にするにはボランティアが頼みの綱だ。常用漢字の入門字典『常用字解』の漢点字訳には6年半費やした。万葉集の解説本など漢点字訳された10種計約220冊は習得者なら誰でも読めるよう横浜市立中央図書館に納められている。

「本は生きる糧」と岡田さん。点字を知る視覚障害者にとって指は目だ。漢点字の触読によって広がる言葉の世界と同じ視覚障害者に伝え、もっと読める本が増えればと願う。

【有田浩子】

「東京漢点字羽化の会」第133～135回

例会報告とわたくしごと

木村多恵子

2017年1月の例会(第133回) 1月11日(水)

13…30、15…30、港区ヒューマンプラザ

7階第1会議室

女性の方が例会を見学に来てくださった。入会は自分でやれそうか実見してから決めるとおっしゃった。是非入会していただきたいと願っている。

朝日の歴史学のグループ分けを決めていただいた。横浜の印刷はIさんとSさんと、新しくIさんが行ってきた。何時もありがとうございます。

学習会のサポートをしてくださる方の確認をした。

2017年3、4月の予定を決めた。

岡田さんが記号の書き方その他の細かい入力方法をおさらいを含めて皆様に説明した。



2017年2月の例会(第134回)2月8日(水)

13:30~15:30、港区ヒューマンプラザ

7階第1会議室

横浜からYさんが見え、『萬葉集釋注』の6巻について説明してくださった、皆様どうぞよろしくお願いたします。

今月も新しく例会を見学に来てくださった方がおり、この方も入会してくだされば、と願っている。

朝日「歴史学」の入力グループを決めた。

いつものように、基本的な記号類、その他、入力方法について質問を受け、今回も岡田さんが丁寧に説明をした。

2017年3月の例会(第135回)、3月8日(水)

13:30~15:30、港区ヒューマンプラザ

7階第1会議室

1月と2月に見学に見えたMさんは、2月のときから、2月の例会に見学に見えたYさんは即日入会を決めてくださり、お二人とも朝日の「歴史学」も、『古

語辞典』の正式な入力者としてお仕事を担当して下さることになった。

何時ものように朝日の記事入力グループ分けを決めた。

学習会のサポートをお願いする方を確認した。

3月15日の横浜での印刷をして下さる方を決めたが、何時ものお二人の他に、新しい方にも印刷に慣れていただきたいと申しあげたら手を挙げてくださるかたが出て、その積極性に感謝している。ありがとうございます。どうぞよろしくお願いたします。

5月、6月の活動の予定を決めた。

岡田さんが丁寧に入力方法を説明した。

3月15日の午後、会発足当初からの会員のS様の娘さんから突然お父上の悲しいお知らせが入った。たった1週間前に例会にいらして何時ものように活動くださったのに！

3月20日10時より目黒で、しめやかなうちに、ぬくもりのあるご葬儀が行われた。

会からは10名ほどが参列させていただきました。

何時も全体が和やかになるように気配りをしてください
さっていたSさんにもうお会い出来ないと思うととても寂しい。S様12年間漢点字のために本当にいろいろ
尽くしてくださいましてありがとうございます。ご
遺族に沢山お慰めがありますように！

3月18日に予定されていた学習会は急遽お休みに
した。

* 予告

2017年4月の例会(第136回)、4月12日(水)

13:30~15:30、港区ヒューマンプラザ

7階第1会議室

2017年4月の学習会(第107回)、4月22日(土)

17:30~19:30、場所ヒューマンプラザ

7階第2会議室

2017年5月の例会(第137回)、5月10日(水)

13:30~15:30、港区ヒューマンプラザ

7階第1会議室

2017年5月の学習会(第108回)、5月20日(土)

17:30~19:30、場所ヒューマンプラザ

7階第2会議室

2017年6月の例会(第138回)、6月7日(水)

13:30~15:30、港区ヒューマンプラザ

7階竹芝小ホール

2017年6月の学習会(第109回)、6月17日(土)

17:30~19:30、場所ヒューマンプラザ

7階第2会議室

わたくしごと

夫を送って喪の中に「埋没」とまでは言わないけれど、音楽もラジオも聞かず、本も読まず、遺影に備えた沢山の花の一つ一つにそっと触りながら、手を伸ばせば肩に触れられそうな近さの彼と何気ない会話を交わっていた。

そんな折、一人残されてしまったわたしのことを知った知人が、ミニバラの一鉢を携え、サンドイッチまで持って弔問に来てくださった。

この4カ月余りのうち、入院2ヶ月、後の2ヶ月を、我が家のこの部屋で、悲しくはあっても、恵まれ

た日々を過ごし、充実した旅立ちの様子も含めて、わたしは止めどなくしゃべった。

傾きながら静かに聞き終わり、暫くして、彼女は言った。

「お話はすっかり変わるのですがいいですか？ちよつと唐突かもしれませんが、わたしはどうやら子育ても一段落（いちだんらく）かと思うのです。今のところ直ぐ、親にかまけなければならぬこともなさそうなので、もし多恵子さんがよかつたら、時々、多恵子さんと一緒に本を読みたいと思うのです。不定期でお互いの予定を相談しながらでよければ、来てもいいですか？」

わたしの驚きと喜びは言うまでもなく大きく、「今泣いた鳥がもう笑った」の例えどおりであった。

その日から7年経った。

そのあいだ彼女は、わたしが希望する児童書を中心に、会えたその日で完結するもの、あるいは何回かに分けて読み終えるもの、彼女の推薦本など何冊も読んでいただいた。

あるとき、「絵本は好きですか？」の問いに、わたしは、「魅力はあるけれど、やはり何か欠けているのか、ピンとこないのが本音です」と言いつつ、電車で隣り合わせた母子（おやこ）のことを話した。

「お母さんが小さい声で、幼稚園にも行っていないなそうな子に、『機関車トーマス』を読んでいるのを聞いていたら、わたしまで楽しくなつたのです。絵については二人とも分かっているから、わたしは二人の会話の断片で想像するしかありませんが、それでもお母さんと子供の話がうれしそうなので、絵本もいいなと思ってたのです」

「では、上手ではないけれど、わたしが絵の説明をしてみます。いい絵本が沢山あるのですよ。今度持ってきて来ます」の約束で、その第1回が『くまとやまねこ』である。

以下、絵の説明文と、本そのものの文章を適宜拾いながら、友人の説明は「」の中に、引用文は「」の中に、引用文中の会話は「」を使わせていただきます。わかり辛いところはご容赦ください。

くまとやまねこ

最初、この本に使われている紙の色合いと、基本的な絵の色遣いの説明をしてくださいました。

「全体に地味な色遣いです。紙は灰色で、表面がざらざら、でこぼこした感じの紙です。」

触って見ると、ざらざら感はなかった。

「塗られている色はほとんど黒で、その黒の中に白が少しあります。しかも、大きな黒の周辺がだんだんぼかされて、灰色になっている、モノトーンです。この色遣いが特徴です。そのほかとところどころ白に交じって、ちよこん、ちよこんとピンク色が使われています。」

大人っぽい本だ、とわたしは思った。

「まず扉絵の絵です。」

真ん中に、息を引き取った小鳥が、安らかに目を閉じて、手を上に上げて、仰向けになって横たわっている絵です。小鳥は白で、その周りには全部黒く塗られています。その黒の周辺がぼかしになって、だんだん灰色

になっています。

次のページから文章があります。」

「ある朝、くまはないていました。なかよしのことりが、しんでしまったのです。」

「くまは森の木をきって、小さな箱をつくりました。」

木の実のしるで、箱をきれいな色にそめ、なかに花びらをしきつめました。それから、くまはことりをそっと、箱のなかにいれました。」

「ことりは、ちよっとひるねでもしているみたいです。さんご色のはねは、ふんわりしているし、黒い小さなくちばしはオニキスという宝石そっくりに、つやつやしています。」

「白い花びらに埋もれている小鳥をじっと見つめている熊の絵や、熊が森でのこぎりを使って木を切っている絵、小鳥を納めた箱などがあります。」

熊が着ている白っぽいシャツと、小鳥の一部が白、そのほかは黒です。その黒の周辺は少しづつぼかしのようになっています。だんだん薄くなって、灰色になっています。

ます。」

「くまは、きのうの朝、ことりと話したことを思い出しました。」

「くまはことりに言ったのです。」

「ねえことり。きょうも、「きょうの朝」だね。きのうの朝も、おとといの朝も、「きょうの朝」って思ってたのに、ふしぎだね。あしたになると、また朝がきて、あさってになると、また朝がきて、でもみんな「きょうの朝」になるんだろ。ぼくたち、いつも「きょうの朝」にいるんだ。ずっとずっと、いっしょにね。」

するとことりは、首をちよこんとかしげていいました。

「そうだよ、くま。ぼくはきのうの朝より、あしたの朝より、きょうの朝がいちばんすきさ」って。」

「でも、もう、ことりはいいのです。」

「ああ、きのうはきみがしんでしまうなんて、ぼくはしりもしなかった。もしも、きのうの朝にもどれるなら、ぼくはなにもいらぬよ」

くまは、大つぶのなみだをこぼしていいました。」

「いつも、どこへいくにも、くまはことりをいれたその箱をもってあるくようになりました。」

森のどうぶつたちが、たずねます。

「おや、くまくん。すてきな箱をもってるじゃないか。いったいなにがはいってるの？」

「森の中で兎やリスが熊に話しかけている絵です。」

「けれど、くまが箱をあげると、みんなこまった顔をしてだまってしまいます。それからきまつていうのでした。」

「くまくん、ことりはもうかえってこないんだ。」

つらいだろうけど、わすれなくちゃ。」

「このページには熊はいなくて、リスと、2匹の兎がこつちを向いています。」

「くまはじぶんの家のとびらに、なかからかぎをかけました。」

「くらくしめきつた部屋で、ひるも夜もじつとす

わっていると、ときどきあさくてもじかいねむりがや
つてきます。くまは、いすにすわったまま、すっかり
つかれきつて、うつらうつらするのでした。」

「ある日のことです。 ひさしぶりにまどをあけ
てみると……なんていいおてんきでしょう！」

「熊が窓を開けて、外を眺めている後ろ姿の絵で
す。」

「風が、草のにおいをはこんできます。 くまは
そとにでて、白いものぼっかりうかんだ空を、はじ
めてみるもののようにみあげていました。」

「熊が鼻の上に突き上げて匂いを嗅いでいるような
顔つきで、目をつぶっています。

箱はしっかり胸に抱きしめています。」

「くまはあるきだしました。」

森をぬけ、川べりの土手にのぼると、草はあおあお
としげり、川はきらきらとひかっています。」

「川があつて、橋があつて、土手があつて、木が生
えていて、水が流れていて、花も咲いています。その
遠景にシルエットで熊がいます。」

「おや？みなれないやまねこが、土手にねころん
でひるねをしています。」

ぼろぼろのリュックサックと、おかしなたちの箱
が、草のうえになげだされています。」

「遠くから熊が、山猫を見つけて、熊が近づいて来
る様子です。」

「くまは、おかしなたちの箱のながみ、みたく
てたまらなくなりました。」

「〈きみ……〉」

ながいあいだ だれともしやべっていないかつたの
で、くまのこえは かすれていました。

〈なにか、よう？〉

やまねこは、かた目だけあけていいました。

〈きみのもっている箱を、みせてほしいんだ〉

つかえながらくまがいうと、

〈いいけど〉

やまねこは、こんどは、りょう目をあけました。「
「熊も山猫も、横顔だけの絵で、ちらつと山猫が熊

をみています。」

「へくまくん、きみのもっているきれいな箱のな
かを見せてくれたら、ぼくもみせてあげるよ」

「山猫が起き上がって座っています。」
周りにお花がたくさん咲いています。」

「くまはちよつとまよいましたが、箱をあけまし
た。」

ことりは、いいにおいの花びらにつつまれて、とて
もきもちよさそうです。

しばらくのあいだ、やまねこは ことりをじつとみ
つめていました。

それからゆつくりかおをあげると、いいました。」

「へきみは、このことりと、ほんとうになかがよ
かったんだね。ことりがしんで、ずいぶんさびしい思
いをしてるんだらうね」

くまはおどろきました。こんなことをいわれたの
は、はじめてです。」

「箱の中で安らかに目をつむって、手を上げて仰向
けに横たわって、眠っている小鳥の絵です。」

「やまねこが、じぶんの箱をあけると、なかから
でてきたのはバイオリンでした。」

へきみとことりのために、1曲えんそうさせてく
れよ」

「次の2ページ続きの絵には、言葉は無く、山猫
が、立って、目をつぶって、バイオリンを奏でていま
す。熊は座って、箱を抱えながら目をつむってじつと
聞いています。小鳥と過ごした沢山のことを思い出し
ているようです。」

周りに、お花が咲き乱れています。

バックは黒、その周囲はだんだんぼかした灰色にな
っています。」

「やまねこがバイオリンをひいています。」

おんがくをききながら、くまはいつのまにか、目を
とじていました。すると、いろいろなことが思いたさ
れるのでした。

ことりは、イタチにおそわれて、ケガをしたので
す。

いくばんもねむらずに、くまはことりのかんびよう
をしました。ずいぶんひどいケガでしたが、ことりは
けつしてなきごとをいいませんでした。それより、イ
タチにいくいつかれて、おばねがぬけてしまったのを、

はずかしがっていたものです。

バイオリンのおんがくは、ゆっくりと、なめらかに
つづいています。」

「熊が音楽を聞きながら、目をつむって小鳥のことを
を思い出している様子と、小鳥がイタチに追われている
場面が、2ページに分けて描かれています。」

「あのと、くまはことりのために、きれいな葉
っぱをあつめたのでした。ぬけてしまったおばねのか
わりに、おしりに葉っぱをむすびつけてあげると、こ
とりはとてもよろこびました。色とりどりの葉っぱを
みようと、うしろむきにくるくるまわっていたことり
のすがすがしさにうかび、くまはすこし、にっこりしま
した。」

「次の2ページ続きの絵は、葉っぱや木の実や、尾
羽根など、ひとコマひとコマがあり、いくつかの小鳥
のポーズも描かれています。」

この中で、葉っぱをおしりに結びつけた糸だけがピ
ンクで、そのほかは全部白、黒です。
周囲はだんだん灰色になっています。」

「・・・」

この後、熊は山猫と一緒に小鳥のお墓を作りまし
た。

「・・・」

「へさて、そろそろ行くとするかな」

やまねこは空をみあげました。

「きみ、どこへ行くの？」

くまがきくと、

「さあ、気のむくままさ」

やまねこは、そういって、バイオリンケースをかつ
ぎました。

「町から町へと、旅をしてバイオリンをきいても
らうのがぼくのしごとなんだ。」

「きみもいつしよにくるか？」

「え？ぼくもいつしよに？」

「・・・」

熊は、このとき山猫から借りたタンバリンを持って
山猫と一緒に音楽の旅回りに出かけました。このタン
バリンに付いているヒモもピンク色です。

以下は省略させていただきますが、熊が山猫の豊か
な音楽によって大きな慰めを得ら（29ページに続く）

漢文のペリシ

虎の威を借る狐

虎^{メテ}求^ニ百^ヲ獸^ヲ而^{シテ}食^{ラヒ}之^ヲ。
 狐^ヲ曰^ク、「子^ニ無^{カレ}食^{ラヒ}之^ヲ、
 得^{タリ}狐^ヲ。狐^{曰ク}、「子^ニ無^{カレ}食^{ラヒ}之^ヲ、
 食^{ラフ}コト^ヲ我^ノ也^{ナリ}。天^ノ帝^ノ使^ム我^ヲ、
 長^ニ百^ニ獸^ニ。今^ニ子^ニ食^{ラハバ}我^ヲ、
 是^レ逆^ニ天^ノ帝^ノ命^ニ也^{ナリ}。子^ニ以^テ我^ヲ為^{サバ}不^ト信^ゼ、
 子^ノ先^ニ行^セん。子^ニ隨^ヒて我^ヲ、
 觀^ヨ。百^ニ獸^ニ之^ヲ見^レ、我^ヲ敢^ヘて
 不^ラ走^ラ乎^ト。虎^以て我^ヲ為^ス然^リト。
 故^ニ遂^ニ与^レ之^ヲ行^ク。獸^見て
 之^ヲ皆^ク走^ル。虎^不知^ラ獸^ノ
 畏^レ己^ヲ而^{シテ}走^ル也^{ナリ}、以^テ為^ス、
 「畏^ルナリト^ヲ狐^也。」
 (『戦国策』)

虎、百獸を求めてこれを食らい、狐を
 得たり。狐曰く、「子^シ敢えて我を食ら
 うこと無かれ。天帝我をして百獸に長た
 らしむ。今子我を食らわば、是れ天帝の
 命めに逆う也。子我を以て信ぜずと為
 さば、吾子の為に先行せん。子我の後に
 随したがいて觀よ。百獸の我を見ば、敢
 (あえて走らざらん乎や)と。虎以て然
 (しかりと為す。故に遂(ついに)これと行
 く。獸(けもの)これを見て、皆走る。虎、
 獸の己を畏れて走るを知らず、以為(おも
 えらく、「狐を畏(おそるるなり)と。

北方の国々が、昭^{しょう}奚^{けい}恤^{じゆつ}(楚の
 宣王の臣下)を恐れているというの
 は本当か、とたずねる宣王に、家臣
 は比喩をもつて答えた。
 宣王の威光を背景に権力をふるって
 いることを、虎の前を歩く狐に喩える。
 ここでは、王への警告にもなっている。

参照図書 『朗読してみたい 中国古典の美文』
 渡辺精一(祥伝社新書)



以下は狐の言葉 (右ページ、ゴシック体の文字部分)

狐 曰 ク、 「 子 無 カレ 敢 ヘテ 食 ラフ
 コト 我 ヲ 也 。 天 帝 使 ム 我 ヲ シテ
 長 タラ 百 獣 ニ 。 今 子 食 ラハ バ
 我 ヲ、 是 レ 逆 フナリ 天 帝 ノ 命
 ニ 也 。 子 以 テ 我 ヲ 為 サバ 不
 ト 信 ゼ、 吾 為 ニ 子 ノ 先 行 セ
 ン 。 子 随 ヒテ 我 ノ 後 ニ 觀 ヲ 。
 百 獣 之 見 バ 我 ヲ、 敢 ヘテ 不 ラ
 ン 走 ラ 乎 」 ト 。



(イラストはインターネットより)

わ、虎!!

(26ページから続く) れたことはご想像いただけると思います。

そして7年を経てもまだ、喪の中にいたわたしのために、大切な友が、この本を選んでくださったことは間違いありません。

友の語ってくれた言葉を上手に再現出来ないことを申し訳ないと思います。それにわたしの思い込みだったり、勘違いだったり、もしかしてこの原本をご存じの方がいらして、「こんなふう聞き取ったの?」と思われましたら、これは友人の責任ではありませんのでその点はお許しください。

この『くまとやまねこ』とのめぐりあいの後、2、3年経た今も、この友は沢山の本を通じてわたしを励まし続けてくださっている。ただただ感謝です。

用いた本 『くまとやまねこ』

文・湯本香樹実(かずみ)

絵・酒井駒子(こまこ)

2008年4月30日 初版

河出書房新社の 途中まで。

2017年3月28日(火曜)

「ご報告とご案内」

一 川上リツエ様、ご逝去

去る四月五日(水)、日本漢点字協会の川上リツエ会長が、逝去されました。

本誌今号では、一報のみとさせていただきます。衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

二 菅野良之様、ご逝去

東京漢点字羽化の会の会長をお引き受け下さっておられました菅野良之様が、去る三月十五日に、急逝されました。通夜は三月十九日、告別式は三月二十日に行われました。

本誌にも学習会のご報告をご執筆下さいました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

三 賛助会費

左は、二〇一六(平成二八)年度に、賛助会費をご納入いただきました皆様の、ご芳名です。心より御礼



申し上げます。

川上リツエ様（日本漢点字協会会長）

村田忠禧様、大滝正雄様、坂口喜代様

吉野紀恵様、武田幸太郎様、馬場威力様

清水静雄様、岡 稲子様、高橋かず様

政井宗夫様、田崎吾郎様、河村美智子様

関口常正様、遠藤幸裕様、木原純子様

田中かほる様

有効に使わせていただきます。

誠にありがとうございました。

四 『萬葉集釋注』第五卷

横浜漢点字羽化の会では、『萬葉集釋注』（伊藤博著、集英社文庫）第五卷の漢点字版を完成し、この三月に、横浜市中央図書館に納入致しました。

『萬葉集釋注』は全一〇巻、毎年一卷ずつ漢点字訳

して、昨二〇一六年度は、第五卷を完成しました。

第五卷には、万葉集の巻九と巻十が収録されています。この巻は、以後の歌集を規定する春・夏・秋・冬、またそれぞれに相聞・挽歌・羈旅という部立にまとめられていたり、後の物語文学に続く筋立てなど、興味をそそる内容となっています。

漢点字使用者の皆様、どうぞご利用下さい。

五 『岩波古語辞典』

東京漢点字羽化の会では、『岩波古語辞典』（大野晋ほか編、岩波書店）の漢点字訳を進めております。

このほど力行まで完成致しました。

パソコンで検索できるように、E I Bファイルでご提供致します。

ご入り用の皆様は、お申し出下さい。いよいよ使い心地のよいものになって参りました。お待ち申し上げます。

（Eメール：okada_tr_eib@yhb.ne.jp）

編集後記

▼立て続けにわれわれの身近な存在であるお二方の計報が届きました▼漢点字の

創始者で日本漢点字協会の会長であった川上泰一さんが亡くなった後、その会長職を引き継がれた奥様の川上リツエさんが、お亡くなりになりました。リツエさんとお目にかかったのはかれこれ13年前のことになります。あの頃既にかなりお年を召したようにお見受けしたのですが、何とも貴重な人材を失ったという喪失感はありません▼東京羽化の会の会長として活躍されていた菅野良之さんの訃報は、本当に寝耳に水といった響きがありました。菅野さんとは、羽化の会の新年会で何度かお目にかかったものです。かなり長い間学習会などの報告を執筆されていたので、間接的に付き合いがあった感じがします▼突然の現世との別れは、周りの人々を悲しませますが、周りに迷惑をかけて長患いするよりはずっといいことのように思われます。それなりの年齢に達した私としては、リツエさんのように人生を終えることが出来たら、本当に理想的だと思えます。

(木下 和久)

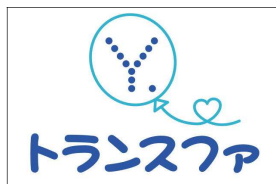
(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。

研修者募集：弊社では、ガイドヘルパー（視覚障害者）の資格取得研修を実施致します。詳細はホームページで。



URL: www.ytrans.net

〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は7月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。